

風土記の丘の花だより₄₀

今、そしてこれから見られる植物(6月21日)

梅雨の中休みはうれしいものですね。目立った花はあまり咲いていませんが、雨上がりにはチョウが喜んで飛び回っていて、こちらまでうれしくなります。



目立たない花ですが、ムラサキニガナがきれいな紫色の花を咲かせています。細い茎を長くのばし、人の背丈より大きくなるものもあります。だから、足元ばかりみていたら見つけられません。花はニガナやイワニガナのような形で、タンポポをうんと小さくしたような感じです。ただ、色が黄色ではなく紫色なのです。



アガパンサスが旧谷山家住宅の庭で咲いています。梅雨時を代表する園芸植物です。「別名をムラサキクンシランと言います。」なんて図鑑に書いてある事もありますが、そんなに呼ぶお方にお会いしたことはありません。みなさん「アガパンサス」とおっしゃいます。これは学名で、ラテン語では「愛の花」という意味らしいですよ。



ネムノキの花が咲いていますが、高いところなので見ることは難しいです。それで散り落ちた花を見ることにしましょう。散った花もなかなかきれいです。マメ科の植物なのにエンドウやソラマメのような花ではありません。たくさんのピンク色の雄しべが目立ちます。そこからさらに長い白い雌しべが出ています。本当に変わった花です。名前の由来は、夜になると葉が閉じるので眠の木というとか、春の芽だしが遅いので眠の木というとか諸説があります。



ヤブランも咲き出しました。まっすぐ花茎を伸ばして、きれいな薄紫色の花をたくさん咲かせます。この草もランと付きますが、ランではなくキジカクシ科の植物です。(ちょっと前まではユリ科でした。) 梅雨には梅雨の楽しみがあります。 松下

風土記の丘の花だより⁴¹

今、そしてこれから見られる植物(6月28日)

今年の梅雨は「つゆらしい」と言うとおかしいですが、よく降りますね。もうクマゼミとニイニイゼミが鳴き出しました。こんなに早いのは記憶にありません。山を一回りすると汗まみれになってしまいます。水分補給と休憩を忘れずに健康的に歩いて



くださいね。さて、先日ネズミモチの花を紹介しましたが、今、トウネズミモチの花が満開です。トウネズミモチは「唐」と付くことでも分かるように、外国からもたらされた園芸植物です。街路樹や道路の分離帯などでよく見かけます。鳥が種を運んできたのか、風土記の丘にもたくさん生えています。ネズミモチよりも葉が大きく、花も、実も大きめです。



万葉植物園を過ぎたあたりの「花木園」で（ハクモクレンやコブシがきれいに咲く所です）ケンポナシの花が見られます。でも、これを書いている6月27日で満開でしたから、あとどれくらい花が見られるか不安です。あまり見かけない木ですから、興味のある方は花もご覧ください。入り口の左、土を盛っている向こう側です。



あちらこちらでヒメジオオンの白い花がたくさん咲いています。春はハルジオンがほとんどでしたが、今はヒメジオオンに入れ替わっています。ハルは「ジオン」、ヒメは「ジオオン」で、ちょっと間違えやすい名前ですね。ヒメジオオンって呼ばないでくださいね。

万葉植物園でセリの花が咲いています。ネムノキから右に行って、左の板の橋の所です。白くて小さな花がたくさんかたまって咲きます。セリは春の七草の一つで、かつてはよく食べられていたそうですが、今では「七草がゆ」の時にスーパーに並ぶ程度で、特別な場合以外は余り食べられていないように思います。セリと一緒に生えている葉が3つに分かれた水草は、アギナシ、隅に一株だけ生えている背の高い草はアブラガヤです。



松下

風土記の丘の花だより⁴²

今、そしてこれから見られる植物(7月5日)

今年の梅雨は本当によく降ります。「雨の日の散歩もいいなあ」なんて言っているうちは良いのですが……。被害がでないことを祈るばかりです。

では、こんな梅雨の時期に咲いている花をいくつか紹介します。



ヤブカンゾウが咲いています。オレンジ色で八重咲きのユリのような花です。以前はユリ科に分類されていましたが、今はツルボラン科ということになっています。古い名前は「わすれぐさ」、この花を眺めていると、世の中のイヤなことを忘れるという中国の古い言い伝えによるものだと言われています。一重のものはノカンゾウで、夏の終わり頃から咲き始めます。



万葉植物園にはキキョウが咲いています。秋の七草にも数えられ、古くから人々に親しまれてきた花です。それで、秋に咲くイメージがありますが、青紫の鮮やかな花はこの時期から咲きます。花もきれいですが、つぼみもプクッとふくらんで可愛い形です。それで英語では Balloon flower (風船の花) と言うそうです。



左のきれいなピンクの花はベニバナセンブリです。このごろ中央分離帯や、荒地、道端などで見かけることが増えてきました。外来植物で、在来の植物が生えづらい所でも平気で生えます。花はきれいですが、元々の植物にどんな影響を与えるか、少し気がかりです。風土記の丘では、資料館の西の裏側にたくさん生えています。



白いヤブミョウガの花も目を引きます。笹のような細長い葉を広げ、中央から長い花茎を伸ばし、小さな花をたくさん付けます。ミョウガと付きますが、その仲間ではなくツユクサの仲間です。木漏れ日が差すような少しくらいところに生えます。梅雨時のうっとうしさを忘れさせてくれそうな花ですね。松下

風土記の丘の花だより⁴³

今、そしてこれから見られる植物(7月12日)

梅雨の雨を喜んでいるのはキノコのように。毎日たくさんのキノコが顔を出してくれます。でも怖い毒キノコもありますから、絶対に持ち帰らないようにしてくださいね。では、今回もまたいくつかの草花を紹介します。



ハマオモトが咲きました。「あれ？はまゆうじゃないの。」とお思いの方もおられることでしょうか。ふつう「浜木綿・はまゆう」と呼ばれるこの花の標準和名はハマオモトです。海岸に生えて、葉がオモトのようだからでしょうね。和歌山県では海岸に限らず、庭や時には街中の道端にも生えていて、なじみ深い花ですね。ヒガンバナ科の植物です。



所々でオニユリの花が咲いています。その名前のように大胆な色彩の大きなユリの花です。茎をよく見ると、葉の付け根に小さなむかごをたくさんつけています。万葉植物園ではもっと暑くなるとタカサゴユリも咲き出します。また、旧柳川家の南の山裾には一株だけですがウバユリがつぼみを膨らませています。咲くのが楽しみです。



万葉植物園でオミナエシが咲いています。秋の七草の一つですが、もう咲いています。キキョウはすでに盛りを過ぎていますが、咲いている日もあります。また、ピンク色が鮮やかなカワラナデシコも少しですが咲いています。まだ梅雨も明けないというのに、気の早い花たちです。



ヤブガラシの花があちらこちらで咲いています。ふだん気にも留めないつる草かもしれませんが、花は花火のようできれいです。この花は虫たちには魅力があるらしく、多くのチョウやハチなどが集まります。「カラシ」は辛子ではなく「枯らし」です。他の木に覆い被さって、藪を枯らしてしまうことから、こんな名前が付けました。ブドウ科の植物です。

梅雨明けはもうすぐでしょうか。

松下

風土記の丘の花だより⁴⁴

今、そしてこれから見られる植物(7月19日)

梅雨あけが待ち遠しいですね。こんな時期に咲いている花はとても少ないです。そんな中、やっと見つけた花をいくつか紹介します。



ツユクサです。青い花びらと黄色い雄しべのコントラストがたまりませんね。よく見ると、青い花びらの下に白い花びらもあります。小さくて気づきにくいですね。万葉集の時代の名前は「つきくさ」、布に直接すりつけて染めるとよく色が着いたことによります。でも、すぐに色あせることから、こんな歌が詠まれています。「着き草に 衣は摺らむ 朝露に 濡れての後はうつろひぬとも」意味深ですね。



もうアキノタムラソウも咲いています。薄い紫色の花が20センチほどの細長い花序を作って咲いています。草丈は全体で50センチから、大きなものでは1メートルを超えるので、よく目立つ花です。



日陰には紫色のヤブランが咲いています。細長くモジャモジャした葉の中から花茎を伸ばしています。写真はヤブランですが、少し小さめのリュウキュウヤブランや、さらに小型のヒメヤブランも咲いています。どれもたくさん咲いているので、ちょっと見比べてみるのも面白いですね。



ムクゲもよく咲いています。白やピンク、一重や八重などいろいろな品種があります。花は一日でしおれてしまい、毎日新しい花が次々に咲きます。万葉の昔は「あさがほ」と呼んでいたそうです。「あさがほ」はキキョウのことだという説もありますが、遠い昔のことなので、誰にもはつきりとはわかりません。万葉集にはムクゲを詠ったこんな歌があります。「こいまるび 恋は死ぬとも いちしろく色には出でし あさがほが花」。恋焦がれて死ぬようなことがあろうとも、決して顔に出して人に知られないようにしようと、熱い恋心を詠っています。毎日暑いですが、こんな歌のせいで、よけいに暑くなりますね。 松下



風土記の丘の花だより⁴⁵

今、そしてこれから見られる植物(7月26日)

長かった今年の梅雨は各地に大きな被害をもたらしました。中でも山崩れや斜面の崩落は、山が持つ保水力の低下もその一因になっていることでしょう。みんなで森林を守り、草木を大切にしなければならないことを実感します。



ありがたいことです。先日、万葉植物園にいと、ある女性が声をかけて下さいました。「前の花だよりに出ていたベニバナセンブリはハナハマセンブリのまちがいではないですか？」とおっしゃるのです。確かに両者は酷似しています。私は詳しく細部まで観察することを怠り、誤った名前で紹介してしまいました。自分の不勉強を恥じるとともに、ご教示くださった方に感謝しております。ありがとうございます。改めて紹介します。このピンクの花はハナハマセンブリです。資料館西にまだ少し咲いています。



左はサジガンクビソウの花です。細長い花茎を伸ばして、その先に下向きに花を付けます。花と言ってもきれいな花弁があるわけではなく、目立つ花ではありません。サジとはスプーンのこと、葉の形によります。ガンクビは「雁首」で昔、刻みたばこを吸うときに使ったキセルの先の金具のことです。花のうっむき加減がその形に似ていることからこんな名前が付けました。



三枚目の写真はカヤツリグサ科のヒメクグです。クグとは、カヤツリグサによく使われる名前ですが、語源はよくわかりません。小さいのでヒメが付いています。湿ったところに群生し、小さな花が固まって、丸い形になっています。



クサギの花が咲き出しました。葉が臭いので「臭木」ですが、思いようでは「いい香り」です。花がとても涼やかで、名前のイメージとは対照的です。この花にはよくアゲハの仲間が蜜を吸いに集まってきます。

ついでに臭いも嗅いでみてくださいね。 松下

風土記の丘の花だより⁴⁶

今、そしてこれから見られる植物(8月2日)

長かった梅雨もやっと7月31日にあけました。(ほんとうは、あけたとみられるですね 笑) ホントに長く、よく降った梅雨でした。いよいよ真夏です。これまでに増して熱中症には万全の対策をお願いします。



旧柳川家の南の山裾にたった一株ですがウバユリが咲いています。漢字で書くと「姥百合」です。おばあさんのユリという意味ですね。花の時期に葉がないので(実際はあります) 歯がない=おばあさん、また、上下の花びらの間が空いていて、そこから覗く中の様子が歯の抜けた口のようなので、歯がない=おばあさん、いずれにせよ、歯がないのはおばあさんという連想です。おばあさんに失礼ですね。



同じくユリの仲間のタカサゴユリも咲き始めています。このユリは外来植物で台湾が原産と言われています。それが切り花や園芸用に持ち込まれ、今ではあちこちで自生するようになり、特に高速道路沿いではよく群生を見かけます。多くのユリは開花するまでに何年もかかりますが、タカサゴユリは半年もあれば開花します。それでこんなに増えたと考えられています。



ビナンカズラの花がひっそりと咲いています。薄い黄色の花を下向きに咲かせます。冬の赤い実は印象的ですが、この時期に花が咲くことはあまり知られていないように思います。中にはもう小さな実になったものも見られます。冬が楽しみですね。



最後は花ではなく、葉を楽しんでください。これはイネ科の草です。ササのような葉が波打つように縮んでいます。ですからそのまんまの名前が付いています。チチミザサです。写真はチチミザサですが、葉にたくさんの毛が生えたものもあります。それをケチチミザサといいます。地味な草ですが、手にとって観察してください。さてどっちでしょう。 松下

風土記の丘の花だより⁴⁷

今、そしてこれから見られる植物(8月9日)

立秋が過ぎたとはいえ、これからが暑さも本番です。でも生き物は秋の気配を感じたとみえて、風土記の丘ではミンミンゼミもツクツクボウシも鳴き出しました。



旧谷山家住宅の東の庭でカノコユリがきれいに咲いています。カノコとは漢字で書けば「鹿の子」です。花びらの斑点が子鹿の模様に似ていることから名付けられました。以前から風土記の丘を歩かれている人に聞くと、かつてはあちらこちらに、もっとたくさん咲いていたということです。同じユリのタカサゴユリはあちらこちらでたくさんさいています。



アキノエノコログサが道端に咲いています。でもイネ科の草は「咲いています」と言われても、ピンときませんね。この草は「秋に咲くエノコログサ」ではなく、エノコログサとは別の種類です。詳しく調べるには、粒々を取って、虫眼鏡で調べなければなりませんが、だいたい、エノコログサよりも大きくて、穂が大きく垂れていて、何となくザラザラした感じなのがアキノエノコログサです。



万葉植物園にサンカクイの花が咲いています。カヤツリグサ科のこの草も「咲いている」というイメージとはかけ離れていますね。名前のおり茎の断面が三角形です。これはこの草だけでなく、カヤツリグサ科の特徴の一つです。だから名前に「イ」と付きますが、イグサの仲間ではありません。



最後は、ほとんどどなたも気づかず踏みつけて通り過ぎる草です。名前はトキンソウ。キク科です。漢字で書くと「吐金草」です。金を吐き出すという意味です。花が終わって（といっても、いつ咲いたか、いつ終わったか分からないほど小さな花です）できた実をつぶすと、小さな黄色っぽい種が出てくるので、それを「金が出てくる」と見たということ（らしい）です。面白い名前ですね。 松下

風土記の丘の花だより₄₈

今、そしてこれから見られる植物(8月16日)

体温に近い気温の日々が続きます。こんなに暑い夏も久しぶりなような気がします。梅雨が明け、クヌギの木から一斉に樹液が噴き出しましたが、カナブンなどの昆虫はほとんど集まって来ません。何かおかしい今年の夏です。



今回はまず、ちょっと悲しいお話からです。散歩をしていると、幹から粉が出て、葉が茶色に枯れてしまっている木をよく見かけます。ご存知の方も多いでしょうが、それはカシノナガキクイムシ(通称・カシナガ)という昆虫の仕業です。小さな虫ですが、幹に入り込み、水の通り道を塞いでしまうのです。それも一抱えほどもある大木ばかりです。樹種は今のところコナラ、クヌギ、アラカシ、アベマキです。かつてはこれらの木は薪炭として利用され、大木になることは少なかったと考えられます。でも生活様式の変化と共に雑木林は放置され、大木が増えました。そこにこの虫が侵入したのです。大きく広く考えると、自然の仕組みとして、森林の木が世代交代しているのとらえることも



出来ます。現状を止めることは出来ないでしょうが、大きな木が枯れたあと、この森がどんなに再生するかを見守って行く必要があると思います。



さて、話を野の花に戻しましょう。

左の白い花はネコハギです。万葉植物園入り口の左側で咲いています。一般的なハギのように茂ることなく、低いところに生えて広がります。葉が丸く毛深いので、ネコが丸まっているように見える、ということですが、いかがでしょうか、そう見えますか。



最後はミソハギです。元々は身を清める「禊ぎ・みそぎ」に語源があるようです。花の色がハギに似ているのでミソギハギ、それがいつしかミソハギになったといわれています。谷山家(一番下の東側)の庭で咲いてい

ます。お盆の頃に咲く花です。

松下

風土記の丘の花だより⁴⁹

今、そしてこれから見られる植物(8月23日)

この猛暑はいつまで続くのでしょうか。外を歩いていると、気分がわるくなる場合があります。そんな時は、ためらわずに日陰で休憩し、水分補給してくださいね。

こんな暑さの中でも野の花は咲いています。しばし立ち止まって、観賞してみてください。オレンジ色のノカンゾウが少し前から咲き始めています。梅雨時に咲いていたヤブカンゾウに似ていますが、花は一重咲きです。万葉植物園や、柳川家の北側、ニッケイの木のそばのベンチの横に咲いています。ヤブカンゾウより少し色が濃い感じですが。昔は「忘れ草」と呼ばれていました。この暑さを忘れさせてくれればいいのですが。



道端でキツネノマゴが咲いています。小さな花ですが、よく探してみると、そこかしこに咲いていると思います。色は、白からピンクまで濃淡があります。それにしても「狐の孫」とはおかしな名前です。私は語源を知りませんが、いろいろ考えてみるのもおもしろいですね。スマホなんかで調べるのもいいでしょうが、自分なりに想像をふくらませるのも楽しいでしょうね。



黄色いオトギリソウも咲いています。細い茎が直立し、上の方でいくつかに分かれ、その先に黄色い花を付けます。漢字で書けば「弟切草」です。なんと物騒な名前でしょう。昔、約束を守らなかった弟を兄が斬り殺したという言い伝えから名付けられた薬草です。野の花は、姿形も興味深いですが、こんな由来を知ること面白いですよ。



最後は花ではなく、地味なシダです。それも面白い名前のシダ、その名もゲジゲジシダ。冗談とお思いかもしれませんが、ちゃんとした標準和名です。中央の軸の両側に小片が付いていて、それがゲジゲジを連想させたのでしょうか。でも、シダはどれを見ても同じに見えますよね・・・。



松下

